

第8部会

文が有る。非常に頭を低くたれて、自己紹介をし、弟子の、康守と安行をつかわして、徳一の協力を求めている。

末木氏と苦米地誠一氏との間に、若干の違いは有るが、苦米地氏は、『未決』は空海の『勸縁疏』以前の作と説き、又、『未決』は、空海の『付法伝』以前と説いている。

内容について言えば、徳一が、空海のどこまでを見て、この『未決』が書かれたのか、くわしいことは分らないが、少なくとも、引用されている『菩提心論』等は、空海の『御諸来目錄』に有り、それ以後、おそらく、空海より、徳一に与えられたものと考えてもよいかも知れない。

真言宗には「行」と「慈悲」を欠いてるという疑いについて考えてみれば、徳一は、「経」と「論」とを分けて、菩薩の論師は「経」にないことを述べ、その「論」に随うのを疑問としているが、徳一は「行」が具わってないと批判するけれども、『大日経』住心品第一の初めの偈に「無量智を成就し、正等覺を顯現す。供養行を修行して、是より始めて発心す。」と有るので、かならずしも徳一の論難は、あたってはいないと思われる。

又、徳一は、「慈悲」を欠く、と言っているが、『大日経』住心品第一に、「菩薩心を因と為し、悲を根本と為し、方便を究竟と為す。」と有るので、これも、徳一の論難がかならずしもあたっていないと思われる。又、「今真言の修行者は、凡位から仏位に入ることができるから、十地の菩薩の境地をも超越するのである、と言ったのは、菩薩の示現と点によって説いているのであり、真実の菩薩ではないと知るべきである。」と言っ

ているが、その後に続く文章に「即ち凡天の位を越えて、仏の所行の所に入り、如来家に生存し。種族に瑕玷なく、仏と供に平等なり、さだんで無上覺を成すべし」という文章を、引用するのを省略している。

又、徳一は、「菩薩の十地の行を超越する」というのは、『大日経』の説ではなく、龍猛の説であると言っているが、『大日経』住心品第一に、「百六十心を超えて、広大の功德を生ず」と、摩訶毘盧遮那世尊が金剛手に告げて言はく……という最初の偈の中に有るので、これも又、徳一の主張が、かならずしもあたっていないと思われる。

又、徳一は、真言行者は、ただ「観行」のみをおさめて、「凡位から仏位に入る」と言っているが、これについては、仏説、つまり「経」にそむいて、「論」を信じていると論難しているが、この点については、今この疑問を未決という点を、私には、何とも言えない分らない部分である。

一遍教学の一試論

——一向俊聖との比較を中心に——

長 澤 昌 幸

はじめに

時宗宗祖一遍(一二三九—一二八九)が活躍していた中世には、一遍と同様に各地を遊行し念仏を布教していた勧進聖が無

数にいたと考えられる。旧時宗一向派祖とされる一向俊聖（一二三九—一二八七以下一向）もそのひとりである。一遍と一向に関する先行研究は、いくつか見られるがそのほとんどが伝記などを中心とした歴史学的な考察がほとんどで、学問的な考察をしたものは少ない。本稿は「一遍教学の一試論——一向俊聖との比較を中心に——」とテーマし一遍と一向との学問的な側面、特に念仏思想について考察を試みたい。

一向の伝記や教団史などに関する先行研究は、近年みることが出来るものの、思想に関して管見の限りでは、河野憲善「一向上人の念仏思想」（『藤沢市史研究』二二号所収一九八八年一月）がある。

一遍『一遍上人語録』（岩波文庫本）

又云、中路の白道は南無阿弥陀仏なり。水火の二河は我等が心なり。二河にをかされぬは名号なり。

又云、往生は初の一念なり。初の一念といふも、なほ機に付ていふなり。南無阿弥陀仏はもとより往生なり。往生といふは無生なり。此法に遇ふ所をしばらく一念といふなり。三世截断の名号に帰入しぬれば、無始無終の往生なり。臨終平生と分別するも、妄分の機に就て談ずる法門なり。南無阿弥陀仏には、臨終もなく、平生もなし。三世常恒の法なり。

一向俊聖『一向上人伝』

浄土宗も機を見て、猶同異二類ひの助業を励（勸）む。此宝号何の不足あらんやとて、浄土の宗名も棄損そ、経論の義学を放却し一処不住に行脚して、念仏を西海に勧進し給ひけるに、其勧化に帰する者、星のごとく馳せ、雲のごとく集まりて、門

葉もまた盛んなり。

読誦に二種あり。浄土の三部経を読むは正行也。其余の経を読むは雑修なり。正行と言ハ、五種の行に通ず、五つの中前三後一の四つハ助業とて、念仏の助に修する事なり。念仏は弥陀の本願の行なれば、正定業と名つけて侍る。雑行助業も往生の行となれども、本願の行には非ず。行し易くて功高きは念仏に侍る。と述べられている。

両者の思想を伝える史料からつぎのことを考察した。思想背景には、一遍は西山義を、一向は鎮西義を基底としてそれぞれの思想、特に念仏思想を展開していることが窺えた。

一遍は、西山義の機法一体に立脚しながらも南無阿弥陀仏の名号そのものに絶対性を見いだしている。臨終と平生については、只今称える念仏によって臨終即平生と一体であることを説く。

浄土宗三祖然阿良忠の門下である一向は、法然に立ち帰ったかのように一向専修に徹し、同異二類の助業を勧めることなく南無阿弥陀仏の名号を宝号と称し、阿弥陀仏の本願力に着目して念仏を勧めている。

念仏一行に徹底して修した点については、一遍も一向も共通しているものの、弥陀の本願やすべての行が名号に内包されていると説く一遍に対し、あくまでも弥陀の本願力による念仏を説いている一向とでは、この点で相違しているといえよう。